

# 今宵、夜空のその先へ。

## サマーセール開催中。

テーブル連続小説  
ヨソラノムコウへ

第6話・星空の下の距離 distance 離



届けに行きましょう。

天の川が空に流れ出るある日、後志のとある山の展望スポットに、君と二人きりでやってきた。

「すごく綺麗！こんな場所が後志にもあったなんて！」

「見せてあげたかったから。満天の星ってやつをさ」

青白く光る星の光が、はしやぐ彼女の瞳に反射していた。

「それにしても、君も変わったよね」

僕はちよつとわざとらしく驚いた風に言ってみせた。そう、彼女は変わった。夜道や悪路が怖いと言いながら、こんな山奥まで車を走らせてこの通りなんだから。

「うん。私は変わった……変わったんだよ。私」

彼女が僕にもたれかかる。

「だって、私が暗い夜道で立ち止まりそうになってもワイドHIDランプで照らしてくれるし、スマホ連動ナビゲーションはグーグルマップなど普段使い慣れたアプリでの案内を可能にしてくれるんだもの。私、君と一緒にならもう迷ったりしないと思うな」

出会ったばかりの頃、車の運転が苦手だと言っていた彼女。特に苦手だと言っていたバック駐車も、操作が覚えられなく使いくらいと言っていたナビも、今では鮮やかすぎるまでに操っている。僕と出会えた事で、彼女の何かが変わった、なんて言うと思いがりかもしれないが、僕が彼女の背中を押す存在になれたなら本当にうれしい。

「しかし、これだけ星が綺麗だと願う事のひとつとも言いたくなっちゃうわよね」

「何てお願い事する？」

「えっと……ずっと君と一緒にいたい、お気に入りの車種のアウトランダーに乗り続けられますように。何度乗り換えても、絶対アウトランダーを選ぶからね」

星の瞬きが刹那、ぼんやりと輪郭をゆがませた。僕とずっと一緒にいたい——好きな車種にずっと乗りたいと思ってもらえること。それは三菱自動車にとって、何よりもうれしい願い。惜しみなない努力の全てを捧げたいと思わせてくれる、燃える愛という名の魔法の力を僕は今浴びている。

「ずっと私の愛車でいてくれる？」

「当たり前だろ？」

夜空の向こうには、あの星のように輝く未来が待っている。行かなくちゃ。君の手を取った。



